六番物眞似及貌面賜川勝、且御橘宮見此伎蓋俳優之類、神代之遺風也、由是國扇淳風民向禮俗、爾後以此伎爲家傳、川勝歷仕欽明・敏達・用明・崇峻・推古五代及上宮太子、有殊勳、後有故掉扁舟浮于西海、舟泊播州坂越浦、亦漂生嶋東（其岸俗云飛）遂居其地、化村人祭神、無大小祈有應、勅號大荒大明神、中古改爲大避大明神已上。

（神明大荒）（説付の鼻）

○聖德太子御幼稚の初、爲師範唐土より渡處の僧、惠慈を當院に居しめ玉へり。

○舊記曰、高麗惠慈法師來朝時、請入當院、擬一朝國師、爲三論講匠、又聖武帝御宇道慈和尙歸朝時、先宿當院、盛弘此宗、又道昌僧都居當院、鑽仰兩宗之章疏。

（直義の寄進狀）

○揔て廣隆寺に賜る處の綸旨、御敎書、寄領之狀等數通あり。當院同之。當院に附する直義の寄進狀如左。

桂宮院領山城國桂新免可爲三論宗

長日講演料所事

右當院者、班鳩太子經始之舊基也、當宗者、羅什三藏弘通遺敎也、於此靈地、傳彼大乘、曰寺曰法、可歸可崇、是以奉寄一村湫隘之菜田、而爲長日講讀之料所寺號、則桂宮院矣、寺領又桂新免爲、以名稱之符合知純熟之機緣、仰願法水永湛、期三會之時節、悉地圓滿、達二世之願望、懇祈之旨大較如件、

曆應二年十二月廿七日　　左兵衛督源朝臣（在判）

○【盛衰記】曰、侍寄小侍從、元は阿波局とて高倉院の御位の時、御宮仕して有けり。世にまづしき女房にて、夏冬の衣更も便なく有しを悲しみて、廣隆寺の藥師に參て七箇日祈申けれど、驗も無くて今一夜通夜して「南無藥師あはれみ玉へ世中に、ありわづらふも病ならずや」と、詠じて打まどろめるに、御帳の內より白き衣を玉はると夢みて、內え參りける程に、八幡の別當幸清に思はれ、引更はなやかになりし已上。

○木枯社　在廣隆寺門前申酉間民家中。小社（西向）【廣隆寺記】曰、勅自乙訓郡奉迎藥師佛之處、向日明神影向寺門前槻木、忽然枯矣、則此地祭神靈、然後再繁茂如元、仍稱神號木枯明神云云

●衛門御息所第　古在太秦

【後撰集】衛門の御息所の家うづまさに侍けるに、そこの花おもしろかなりとて、折につかはしたりければ、聞えたりける、

山さとに散なましかは櫻花、匂ふさかりもしられ

さらまし

かへし　　藤原師尹

匂ひこき花の香もてそ知られけるうへてみるらん人の心は

（寺內の塚）

太秦領內　所在塚

●寶鏡塚　●安養塚　●千首塚　●尼塚

●組石　●和泉式部塚在上　右由來不詳。

○海生寺　在太秦南市河村　今草庵（西向）宗旨禪　開基深山

○深山影堂　在同所西向。

（破車）（七百歲）

【深山行狀記】曰、師不稱名氏、又不知何許人、常乘破車、在四衢道、道傍小竪隨其所欲推之、里人名之曰破車、或語以七百歲事、而自歷試、因玆又呼七百歲焉、慕鳥窠之風、（道林禪師也）一夏座禪於筑之筥崎松樹上、夏了特往謁直翁侃侃問、聞汝今夏樹上修禪是否、師曰是、侃曰、如何是樹上禪、師曰上也下也、時檯上蟻行上下、侃指曰、這個亦能座禪、師領之、侃便趕出、於後剃髮爲僧、諱正虎、字深山、結庵于山階山中、每往來光藏之塔、自持時果供、木像矣、臨終之前十日、來光藏禮辭木像、訖謂石無心曰、以端午日入于山去、携一衆來而送、我臨期石欲行、衆咸曰、風狂之言不可信焉、不行已、石亦行遲、師三回出門待之、日已過中、乃詈言、同門出入宿世窓家、違吾約言、不來耳、便披袈裟着草鞋、拓桂杖、庵特棲、怡然而化、豫於庵後占喪地、而自積薪如龕矣、石獨及晡到、已見座化、速令人告光藏衆來、卽茶毘、烟消火滅、無骨灰矣、師誡散聖之應化乎已上。

常盤（地名）　在太秦北。中に往還路あり。東は京師大炊御門通、西至嵯峨。里・杜詠和歌。

【續千載】

秋そとも分ぬ常盤の里人は、たゝ夜寒にや衣う

つらん　　法眼兼譽

【風雅集】

父なくなりて後、常盤の里に侍ける比、三月ばかりに源の仲正が許につかはしける、

春までもとはれさりける山里を、花咲なはと何思ひけん

かへし　　寂念法師

諸ともに見し人もなき山里の、花さへうくてとはぬとをしれ　　仲正

○常盤杜　在里中往還道北側。杜下有小堂。安石彫阿彌陀佛。杜は榎・椋也。古歌には詠稚・柴・青柳。

【御集】

さほ姬の染し綠や深からん、常盤の杜は猶紅葉せ